



歌集

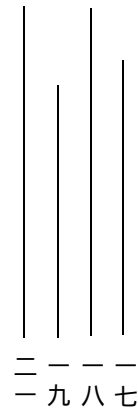
田边誓司

菜花

歌
集

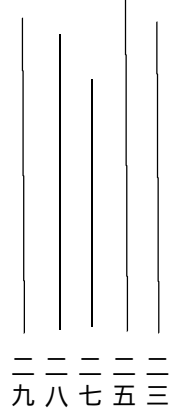
菜
花

故里両子(七首)
家庭(五首)
工場群(五首)
囁目(九首)



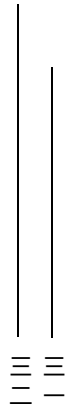
昭和六十三年

山光(十首)
海畔(六首)
泥遊び(六首)
舗道(六首)
囁目(四首)



昭和六十四年・平成元年

昭和逝く(五首)
干潟(六首)



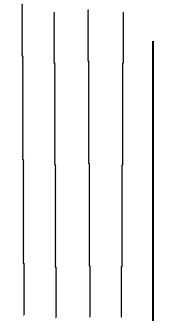
わが町 (六首)
男池 (五首)

平成二年

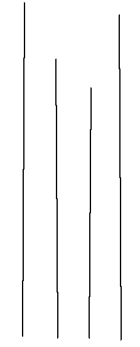
幼子 (七首)
生けるもの (六首)
足摺ほか (七首)
囀目 (七首)

平成三年

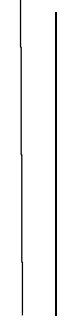
海鷗 (六首)
なぎさ (十首)
郷愁一 (五首)
郷愁二 (三首)
草雲雀 (八首)



四三
四五
四七
四八
四九



三七
三八
四一
四一
四一

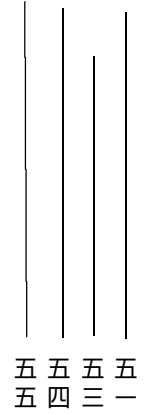
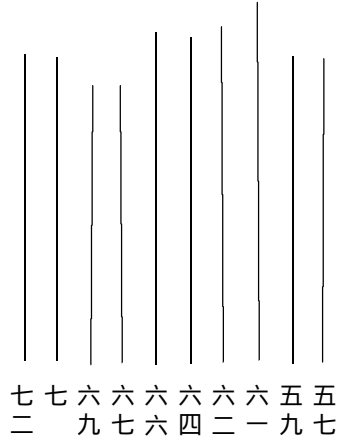


三五
三三

平成四年

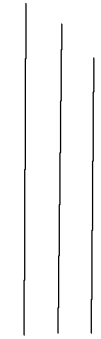
錯誤 (十首)
兄妹 (四首)
聽風 (六首)
鯖雲 (七首)

砂の音 (五首)
春疾風 (九首)
蛩 (六首)
焼仏 (九首)
休日 (七首)
飛行機雲 (七首)
匹見峡一 (七首)
匹見峡二 (六首)
六郎丸 (六首)
秋彼岸 (八首)



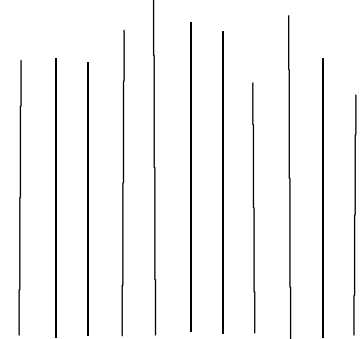
平成五年

彼岸花（七首）
啄木鳥（六首）
川筋（七首）



七
七
七
六
五
三

始終なき時（六首）
夜の風音（六首）
草焼（八首）
有明干拓地（十首）
青き闇（七首）
筑後川（三首）
月光（五首）
四万十（四首）
北海道（十二首）
おもひ草（三首）
茶の花（六首）



七
八
八
八
八
八
八
八
九
九
九
四

冬枯道（七首）

九五

平成六年

闇光（十一首）

九七

桜花（四首）

九九

宇ノ気（八首）

二

持石・聖湖ほか（八首）

四

那智の滝（六首）

五

由布山麓（四首）

七

目黒辺り（四首）

八

夢中（二首）

八

夏から秋（十四首）

一八

冬の日々（八首）

一

平成七年

平成八年

新年(四首)	二二
阪神大震災(三首)	二四
石原(十首)	二五
転任(五首)	二七
麦秋の風(九首)	二八
葛飾小遊(十四首)	二一
上海蟹(五首)	二四
さみだれ(五首)	二五
再び宇ノ気(四首)	二六
炊煙(九首)	二七
脂の香(五首)	二九
氷解(十三首)	三三
香港・マカオ(十三首)	三三
葛飾再遊(七首)	三六

あとがき

世相（四首）
望郷（六首）
寒居（八首）
歸路（六首）
東風（十一首）
雪零（二首）
わが家（五首）
菜花（十五首）
彼此なき月（十首）

一五四

一三八
一三九
一四二
一四四
一四六
一四七
一四八
一五一

昭和六十年

夕
焼

純粹にならんと保つわが心澄みゆくほどに悲
しみの湧く

かたくりの花ほのぼのと暮れのこる城址の丘
をわが下り来つ

この街に憧れし日のありしとぞ線路に沿へる
路歩みをり

焦燥にかられみたりし日々過ぎてけふの夕焼
しづかに燃ゆる

雑木林のおどろに暮れし街空に星ひとついで
ていたく輝く

帰郷時

椎茸の凶作なるをしみじみとわれに言ひたり
六十の母

春さむき埠頭に来ればふく風にときに流れて
海猫のとぶ

将来は流通拠点になるといふ埠頭につづく草
原広し

脚病みて久しき祖母が縁側の日向にゐざり出
できて憩ふ

花終へし枇杷の一木の立つ庭にあかつきさむ
く粉雪の降る

嘱 目

六十五歳歳首反対の老人らが若き指示者に従
ひあゆむ

ベンチにて憩ひみたれば手配師の近づき来り
雇はんといふ

尾長鳥しきりに啼ける朝の街けふまた暑くな
らんとぞ思ふ

うすあをき狭霧とどこほる街並の底ひへ朝の
光しみゆく

空晴れて日差まぶしき昼の街台風余波のかぜ
の吹きをり

湖

朝霧のわたらふ湖のなぎさにて羽化せし蝶か
砂にとまりて

おほかたは傷を負ひたる白鳥の残りてウトナ
イの湖に漂ふ

古もかく藍色に湛へけんオコタンペ湖が午後
の日に照る

昭和六十一年

海
月

秋風の吹けるなぎさにわが来れば海月点々と
砂に膨らむ

靄かかる遠き町並うすあをく九月の海の色に
交はる

彩灯のともる湾岸上空に飛行機の灯の現はれ
降る

水平線に浮べるとき工場群ふゆの太陽さむ
く出でつつ

柊の花

さえざえと灯りに映えて葉牡丹に降り積む雪
をみつつ帰り来

秋桜を吹き乱したる風やみて暮れゆく頃の庭
の寂しさ

日のあかり朝の寒さのゆるむころ柵の花かす
かに匂ふ

なりはひの故かも知らぬ兄夫婦田舎に住みて
口数の減る

囁
目

みちのくの寒村にしてモルト酒を貯へし倉庫
雪にしづもる

この苑に居つく雀らか猫柳ふくらむ水辺にい
きいきとして

由布岳のこごしき岩根選びしか吊鐘草のひと
つ咲きをり

雨さむき高速道の電光板渋滞二キロの文字光
る見ゆ

昭和六十二年

故里両子

黄華鬢を摘めばたつ香の懐しくふるさとの道
今も静けし

ふるさとに春は来にけり習合の寺の鳥居につ
ばくろ並ぶ

山畑の麦色づきてかんばんしき草の香のする畦
道あゆむ

梅園即ち三浦晋は生涯故郷にありて反観合一
を唱へき

都忘の花まぎれゆく夕まぐれ両子の村ははや
虫の声

心寄せぬし人幾人が亡くなりて今年も稲架の
立つ頃となる

風音も土の匂もなつかしき久保殿山に自然薯
を掘る

家 庭

茱萸の実の色づきしかば鴨の目につくまでに
寄り来て騒ぐ

眠りある幼子の手のをりをりに物掴まんとせ
るさまあはれ

知識欲あらはなる子を嬉しともせはしとも思
ふ絵本読みつつ

さわがしく子の帰り来し玄関に夕べ木犀の香
りただよふ

とほく鳴る汽笛に愁つのりつつああ何処へか
旅に出でたし

工場群

晴天となりたるあした由布岳の嶺あはあはと
雪の降りたり

寒ゆるみたる暁のうみざかひを出づる光に渚
あかるし

夕晴の町の坂道学生らが半ば立ちつつ自転車
をこぐ

夕べには集落の灯の見えぬしが山窪明けて朝
霧の青

雲のまより洩るる夕日に湾岸の工場群のおご
そかに照る

囁 目

みづぎはに近づき来る白鳥の胸たくましく揚
力あらん

うつつともなき蒼色に湯泉は二百米の地底よ
り湧く

深閑としたる休日の校庭にあふげば樟の萌葉
目にしむ

梅雨前線近づくならん水平線の方に暗雲かた
まりながら

潮干たる河口に残暑の日は照りて無尽数の石
しらじら乾く

錆色に水のしづもる一の池ときに翡翠の鳴き
つつわたる

成田山に遊ぶ

父の生家廃れて久し段畑にことしの蜜柑いろ
づくが見ゆ

父の生家は国見町小熊毛

山あひの安岐路を行けば片晴の山あらはれて
虹の輝く

幻のごとき夕焼の反映が海苔粘の立つ水面に
ゆらぐ

昭和六十三年

山 光

うら寒く山は見えつつ彼岸会のけふの夕日の
ながく明るし

火口巻くなだりの原は朝霧のひくく流れて虎
杖の咲く

眼下の火口湖の水うすあをし底こもる風に漣
たちて

霧はれて日の暑く照る阿蘇原野沸き立つこと
く蝸の鳴く

明けまだき樹林のなかを登りつつ葉擦れの音
にときに驚く

辿り来し由布中腹に朝明けてとほわたつみの
ほのぼのとみゆ

霧さむき嶺のいはほに自生せる水擬宝珠が朝
の日に照る

そばだてる由布岳のうへ蒼然と暮れゆく空に
凍雲うごく

枯色になりたる山が通ひ路に見えていとまな
きわれの明暮

山芋をほりて藪中に憩ふとき木々ふく風の音
のしたしも

海 畔

岩がちの浜に朝靄ただよひて海髪採りてゐん
人とほく見ゆ

けまんさう咲く岬道昼たけて春潮の音とほく
聞こゆる

くろぐろと海は見えつつあかつきの光しづか
に空に満ちゆく

松蝉の鳴く岬径むらさきの浜豌豆がいちめん
に咲く

岬山ゆふかたまけて製錬のけむりは秋の雲に
まぎらふ

干潮にたまたま遇へば青海苔のおほふ渚が通
ひ路に見ゆ

泥遊び

椎茸の不作とならん暖冬に農知らぬわが妻の
よろこぶ

恵海師の旅行記よみて大寒のけふ日すがらに
心なごめり

たまたまに勤を休みもてあます時に疲れし一
日なりき

白じろと泰山木の花ひかる公園ぬけてわが家
ちかし

誘はるるまま庭に出て幼子の泥に喜ぶさまを
見てをり

世に狎れて口数ふえしみづからを顧みて箍の
ごときもの欲る

鋪道

早足に慣れし人らの行きかよふ三年坂の並木
は冬木

風にやや寒さのこれる町通り花屋あかるく菜
の花ならぶ

町灯り色あはあはと夕霧に溶けて寂しき舗道
をかへる

空晴れて吹く春はやちまのあたり青き麦生の
波うち光る

はやち吹く町の舗道を歩みをり群衆のなかの
一人となりて

忽ちにフーン現象の暑熱さり夜更とどろく
風音きこゆ

囁目

塵ほどに姿見えぬし雲雀らはあをき五月の空
に紛れり

生温き風ふくなかに花菖蒲さき盛りをり神楽
女湖畔

町音のときに静もることあらん海猫とほく鳴
く声きこゆ

公孫樹など大方は葉の散り終へて皇居にあふ
ぐ青空寒し

昭和六十四年・平成元年

昭和逝く

高崎の嶺ふる雨にけぶりつつ心寂しも昭和逝く日は

崎山のかこむ入海乳白の光たゆたふ冬のゆめぐれ

大寒の日の晴れ透りまなしたに霧とどこほる安心院の辺り

雪かづく由布の頂まなかひに見えて十文字原峠越えゆく

窓外に粉雪のふる午後にして日のさす部屋に
安らげく居り

干 潟

とりとめのなき形にて海牛は干潟にのこる潮
に横たふ

いちめんに蜷の這ひたる紋様ののこりて寒し
春の干潟は

朝まだきより降り出でし春の雨やはらかにし
て草生に沈む

純白の花なりしかど衰へて黄ばむ木蓮の傍ら
をゆく

川原の菜の花は黄にあふれ咲き故里はいつも
水の音する

町空の朱く濁りて暮れゆけるゆふべ寂しも黄
沙ふりつつ

わが町

おぼおほと八重の桜は咲きみちて日ながくな
りしゆふべ帰路

渚べに飛沫をあげて走る子の細きからだが輝
くごとし

陸ふかく海霧おほふ夕暮はこの町したしわが
住み慣れて

今日もまた暑くしならん町畑の里芋生ふる下
蔭くらし

雲のまより洩るる夕日に湾岸の工場群のおご
そかに照る

わが希ひとほのくごとき思ひにて愁ふる日あ
りおしろい咲けば

久々に風呂に入りしと八十歳半ばの祖母がし
みじみといふ

男池

風のごと軽しと思ふ河鹿にてわが掌にしばし
動かず

冬涸れし山なかの池ひろひたる田螺はあはき
泥の香のする

わがめぐり土の匂のただよひて風なき山に自
然薯を掘る

手ざはりを懐しみつつ庭池にわが掘り来たる
山芋洗ふ

土くさき香に浸りつつ山芋のとろる汁搗るこ
としの冬も

平成二年

幼子

支那海の遠きたぎちの思はれて黄沙とどこほ
る今日の町空

静かなる夕べの町を帰りつつ戦争のなきこの
安けさよ

棕櫚の葉に台風余波の吹きやまぬ夕べ勤に疲
れて帰る

忙しき一日をはりて居間にわが脚を伸ぶれば
その脚軽し

幼子をわが膝に乗せ今宵またしばらく憩ふ重
くなりたり

をりにつけ心昂ぶることあれど私のなきわれ
と慰む

硝子戸のかすかに震ふ音のして雪降りゐんと
夜床におもふ

生けるもの

泥深きはちす田にして必然のごと嘴長き小鳥
のあそぶ

時鳥しきりに鳴きて日出生野は光増しつづ春
ゆかんとす

春たくる野のせせらぎに光りつつ溯りゆく鮪
の群みゆ

水田に泥をついばむ燕よ遠く来しかなや房総
にわれは

川のうへ飛びぬし螢いつせいに草生に下りて
光しづもる

故里の溝に拾ひししじみ貝汚水のゆゑに殖え
しとぞきく

足摺ほか

犬枇杷の匂ふ岬道まなしたに岩礁を穿つ波白
くみゆ

足摺の浜晴れながらわが背丈越ゆるほどにて
波立ち上がる

木にのぼる舟虫などをあはれむに足摺崎は晩
夏の光

立ち枯れし葦生にかよふ水澄みて津房の川も
さむくなりたり

時じくの南風ふく歳晩の手児名の池にわが遠
く来し

木蓮の花芽ふくらみ葛飾の町あたたかし歳晩
にして

水上を走ることくに飛び立ちし鴨おほどかに
冬晴に飛ぶ

囁目

海ぎしに艦船のごと黒ずめる工場のうち日の
昇りゆく

採入を終へし蓮田は均されてたたふる水に薄
氷ひかる

冬庭のさびしき中に咲きつづくアロエの花の
朱を清しむ

心もとなく飛行機の翼動きたり雲塊に向け降
りゆくとき

待宵草の黄の花まじる草生より暑きいきれの
立つ道帰る

朝毎に散りこぼれぬし白萩のけふ花のなき傍
らをゆく

遠々に尾根ふく風の音きこゆ自然薯掘りて憩
ふときのま

平成三年

海鷗

パトリオットスカッドなどに聞き馴れていま
戦争を身近に感ず

湾岸戦争勃発

戦争の実場面とふ映像がゲームのごとくテレビに見ゆる

ふるさとに帰り来れば縁側に切干したる大根にほふ

戦争のなりゆきいへど幾万の海鵜の死にしこ
と語られず

勤めあるわが葛藤のひとつにて正思惟などそのいとまなし

ひすがらに木の芽雨ふる休日
は心やすらけし家籠りゐて

なぎさ

磯岩をふかく穿ちて寄る潮の音あららし牧
崎ここは

接岸の終りしフェリー逸りたるごとき車を次
々に吐く

秩序なくたふれふしたる暖竹の一群ありてな
ぎさは寂し

ひとところ廃物焼きし痕跡のあらはになぎさ
昼顔の咲く

梅雨ぐもる浜しづかにて防風の咲きたる花の
かたはらをゆく

岬山の原生林のなか行けば風なきに夏の落葉
がにほふ

山桃の落実のにほふ岬道は木下いづこも蝉鳴
きしきる

かぜあらし海岸ならん地を這ふごとくに咲け
る野茨あはれ

防波堤の内側ゆけばいづこにも干したる漁具
の乾く香がする

おもむろに明けゆく海に音ひびき夜の漁終へ
し船が帰り来

郷愁一

台風の兆す雨の日わが祖母は暗き納戸の床に
臥しをり

九十歳ちかき祖母ゆくりなく家内のことこま
ごまと言ふ

さしあたり仕事のなしと言ふ兄は農を継ぎし
に稲を作らず

改良を終へし田いづこも青々と稲生ひゐるは
泪ぐましも

暮れそめて影蒼く顕つ川の面にしきりにひび
き蝸が鳴く

郷愁二

いつしかに時過ぎゆきてわが父の生家廃れし
海村寂し

わが父の生まれし家のいまはなく櫟林に礎の
こる

使ふ人いまはなき井戸そのままに父生家跡蝉
鳴きしきる

草雲雀

色づきし稲田のなかの幾ところ休田にして笹
原をなす

異なれる価値の意識に隔たりて生くる現つを
われは寂しむ

秋曇る日のつづきつつ輝をもたざる町はいづ
こも寂し

おもむろに朝明けてゆく高原に風音に似て草
雲雀鳴く

朝霧にかすみて九重連山のみゆる由布岳東嶺
に立つ

御鉢といふ由布山頂の火口跡まはりて沈みゆ
く雲が見ゆ

わが心和ぐとし思ふ一つにて時計をはづした
る腕かるし

いつしかに弾くるごとき積極の心しづまりて
ゆく秋はやし

鯖 雲

堆く積み置かれたる砂利のうへ海猫群れて羽
をつくるふ

かつてわが暮らしたる南太平寺のこる稲田の
稲が色づく

曇天にしづまる峡の段畑の畦にひしめき彼岸
花さく

少年になりたる君にわが託す天祐のもと樹の
ごとく生きよ

とめどなき時に流るる現身を確かむることペ
ン握りしむ

わがうちに重く流るる粘体のごときがありて
この風邪癒えず

あふぎたる空の—ところ鯖雲の月に明りてさ
むざむと見ゆ

聴風

枯草の匂なつかしふるさとの山の日向に坐り
て憩へば

久保殿山にて

椎茸の榎木朽ちたる匂して木暗き山に自然薯
を掘る

自然薯を掘りゐる寒き竹山に高きをわたる風
音きこゆ

懇ろに母の育てしくぬぎ山木々のふとりて伐
採ちかし

祖父ありし頃よりわれの親しめる山にことし
も風の音きく

昨日降りし雪に凍てつく椎茸を静まりかへる
杉山に採る

兄 妹

わが顔をみつつし動く子供らに心のいこぶ霜
月のころ

ひとしきり騒ぎたる子のたはやすく眠りにつ
きし後の寂しさ

みづからを愛称にいふ幼子の生長しゆくほか
を希はず

隣室に眠らんとせる兄妹の声しづまりて夜更
けてゆく

錯 誤

道のべの草枯れゆきて土埃にほへる町はゆふ
ぐれ寒し

二時間余の睡眠にしていくばくか躁となりた
るままに働く

権力を至上のものと思ひぬる思想の硬直は身
近に多し

思はざる暖かき雨降り来ればとりとめのなし
歳晩の町

大仏のこぼたれしかば天満の町さびしけれゆ
げむりが立つ

ふゆばれの町のよそほふ安寧を限あらんと思
ひつつをり

磯岩をいたぶるごとく冬潮の波砕け散る日に
光りつつ

諧謔をいひたる後にわれひとり知るむなしさ
よ幾度となく

さむざむと明けゆく空に今しがた昇りし月と
金星ひかる

おのおのの個人の価値と相容れぬ錯誤重ねて
国は滅ぶか
ソ連崩壊

平成四年

砂の音

春たくる能登に來れば冬の日に荒れけん海のかくもしづけし

アカシアの樹林の丘はひとさまに凧ぎたる能登の海に斜るる

春潮の音しづかにて砂原を歩めば寂し砂の鳴る音

暖かき雨にけぶりて山原はしづまりゐたり草焼のあと

くろぐると焼き尽くされし草丘のなだり明るく春の雨ふる

春疾風

エレベーターに乗りて降りをり一日の勤を終
へし心やすけく

いくばくか日の延びたりと夕空を見つつし歩
むけふの帰路

指示するといふこと知りし幼子が声かんだか
く飼犬を呼ぶ

曇天にひたりて寒く木瓜の咲く蛇崩坂にわが
遠く来し

相對にして幸のあるならんつつをいまは諾
はんとす

暗渠よりほとばしる水湯泉の汚れたる香を曇
にはなつ

夜更けて吹く春疾風ちかくにて静まるときに
遠くに起こる

三月はかく雨降りて過ぎゆくか硝子戸の外ひ
すがら暗し

海のかたいまだに青き空みえて低気圧ゆくこ
のゆふまぐれ

蛭

この家の続きてゆかん保証なく父母と兄椎茸
つくる

十六歳にて嫁ぎ来し祖母が米寿となりてこの
家に住む

掌にとりし蛭つめたき感じにてインクのごと
き匂ただよふ

幼子をともしなひ来れば夕づきし植田いづこも
蛙の声す

寄合の稀となりたる故里の家ひろびろと風吹
きとほる

夏蝉のきこえる声なつかしく座敷に兄とわ
れと昼寝す

焼
仏

戦乱に遭ひて焦げたる木仏と寺に伝へて形い
たまし

加来・船河両氏と国東半島を巡る

空ひくき曇に蜜柑の花にほふるさとの寺わ
が巡りゆく

国東の寺をめぐりて行く道のここもかしこも
えごの花散る

修復をするとしもなくありのまま焼仏置く山
峡の寺

溜池の堤ふく風夏草のあをき香水のおもき香
のする

山昔の散りたる花のここだ見え夏深まらんわ
が生れし村

吹く風のさながら光る草山のなだりに熟れし
野莓をつむ

走水峠にて

野莓を食めばよみがへる思ひあり緑まぶしき
なかに佇む

生まれたるばかりのごとき夏雲が畳なづく尾
根のあひだに見ゆる

休日

帰り来て脚を伸ばせば踵より一日の疲れ抜け
ゆくごとし

何するとなく家ごもるものうさもいつしかわ
れの幸に似る

曇空より来るならん風少し居間に寝てゐるわ
が顔に吹く

昼近くまでひたぶるに眠りたり休日何もした
きことなく

日盛りの海に泳ぎて潮の香とひかりの中に夏
をゆかしむ

八月の潮にひたればまつはりし日頃の汚れ落
ちゆくごとし

逝く夏をわが惜しみつつ生業にかかはりのな
き渚にいこふ

飛行機雲

去年逢ひしとき健かにみえしかど七箇月経て
今は亡き人

河原冬蔵氏

公園に高々と立つえんじゆの樹夏至のひざし
に花房ひかる

後半となりたる梅雨の昼すぎにちまた歩けば
鯉えし酒の香

一すぢの飛行機雲がおもむろに形壊れつつ夏
空に見ゆ

窓ちかくふとき高圧電線が一本見えて夏空あ
をし

検診をさるる個体の一つにて指示に従ふひす
がらにして

辛うじて焼死を免れたりし父この日さかひに
喫煙を断つ

匹見峡一

いくたびも曲りつつゆく峡の道
晩夏の日に光る岩みゆ

山峡の道のいづこも葛の花咲きて
晩夏の光あまねし

穂にいでし芒の赤が下りゆく
匹見の道のをちこちに見ゆ

晩夏の光をかへし静もれる
断崖さびしゆくてに見えて

木々の影やうやくふかき
八月の峡の日ざしに碑は照る

佐藤佐太郎先生の歌碑を仰ぐ

掌を触れてみればたふとく碑の保てる熱が心
にしむる

茂りあふ木々の梢が晩夏の日^に照りわたる山
峡さびし

匹見峡二

谷あひの巖にをれば吹きとほりゆく秋風に眠
もよほす

やうやくに日の陰りつつ吹く風の涼しき赤谷
川原を歩む

しみいつる水にうるほふ断崖の岩にふれつつ
秋の蝶とぶ

谷川の巖の上にあきあかねとわれとしばらく
風に吹かるる

いづこにも萩の花さく山峡は寂しさに似て昼
のしづけさ

山峡の町おだやかに木工も山女料理もなりは
ひのうち

六郎丸

入り方の秋日に照りて山峡の六郎丸の稲田ゆ
たけし

穂にいでし稲田のうへの夕空を北に向かひて
ゆく雲のみゆ

夕寒き校庭にわが待ちをればいま山の端を月
のいでくる

山ぎはの空のはつかに明るみてより忽ちに月
いでにけり

いましがた昇りし月が穂にいでし稲田につづ
く校庭に照る

ぐちぐちと音をたてつつ月の夜蛾の幼虫がも
ちの葉を喰ふ
シンジュサンがわが庭に

秋彼岸

仕事終へこつこつ庵に酒をのむ一日のうちの
安らけきとき

秋たくる波止場の空を海猫が光りつつ飛ぶ風
にうかびて

海猫の飛ぶこの波止場いつしかに心を伸ぶる
わがための場所
安岐港にて

冷えびえとしたる二階に目覚むれば秋たけて
ゆく暁さびし

無き脚がときに痛むと言ひをりし祖父逝きて
より十二年経つ

しみじみと降りくる雨かおもむろに秋の彼岸
の一日暮れつつ

家裏の常はとほらぬ道来れば葛の花ちり朝顔
のさく

彼岸花

昼と夜をあはせもちたる物体としての地球を
映像に見つ

百度の昼夜を八日にて飛びしスペースシャト
ルけふ帰り来つ

にほひたつ如き稲田がをちこちに黄に見えわ
たる恵良谷をゆく

いづこにて拾ひて来しか幼子はマテバシイの
実大切に持つ

昼寝より覚めたる部屋に移ろひし秋の日差を
ひとり寂しむ

をちこちの畦に彼岸花さく見えてこの山峡に
父母の老ゆ

咲きみてる木犀の花にほふ午後風かよひくる
居間にて憩ふ

啄木鳥

大野郡の山に分け入りて啄木鳥の音をききつ
つ自然薯を掘る

医務係の一泊旅行にて

草の実にまみれつつこの藪山に自然薯を掘る
心やすけく

みづからのなし得る範囲おもへるに結論いで
ずわが寝ねんとす

わが家に隣るアパートのタービンか何かの音
の聞こえ昼寝す

さしあたり憂ひごとなく故里の刈田に子らと
落穂をひろふ

黙々と椎茸の榎木起こしゐる母の一生はこの
山に依る

川
筋

トタンめくれるごとき音して夜の更に冬の疾
風がおもひきり吹く

いにしへのごとくに冬の嵐吹く一時にして夜
半に覚めぬし

何ずるとなく故里に帰りつつ去るものを追ふ
心にぞ似る

枯葦のつづくは川の筋にしてふるさと今も昔
のごとし

さむざむと風吹き荒るる干拓地堤を越えて波
しぶき立つ

新田といふ干拓地草枯れてかかる村まで減反
およぶ

冬の雨ふるかよひ路のゆきずりに道路工事の
ぬかるみを踏む

平成五年

始終なき時

音のなく歳旦の日に光りゐる竹群がみゆ川を
へだてて

大連より来りて学ぶをとめごと平等互恵をと
もに讃ふる

姜虹さんへ

昭和天皇の崩御せしより五年経し人日のけふ
雨あたたかし

冬の夜の空をオリオン移りゆく始終なき時の
中のひととき

よりどなき心をもちて十八年積極のみを糧に
勤めき

予め期さざる方に物事の進みゆくことこのご
ろ多し

夜の風音

うちつけに冬の風の過ぐるとき壁にある物い
ちどきに鳴る

風呂いでて匂すがしき幼子を膝に乗せると
もに憩へる

乾きたる夜の空気を喉の奥に感じつつるきひ
とり臥処に

増長も消沈もわがまことにて遣る方なきに夜
の風音

窓外にしきりに雪の降る朝忙しく家をわがい
でてゆく

春疾風の音ひもすがら一塊の土くれのごとう
たた寝しをり

草 焼

窓そとに梅咲きみちて遠々に黄沙にけぐる低
山もみゆ

たまさかに訪ねし旧家庭なかの柿の一木は若
葉萌えぬし

わが育て来し梅の木に十八年経て辛うじて実
の一つ生る

花冷に倦みつつわれはどことなく躰鈍りてけ
ふも勤めき

やはらかき土踏みてゆく畦道になづなの花の
白あふれ咲く

草焼の余燼くすぶる山原を鎮むることく春の
雨ふる

一日ごとに梅の青実のふとりつつ四月二旬の
風あたたかし

若葉してまぶしき樟の老木あり風ふけば梢一
斉に鳴る

有明干拓地

残りたる海の一部が溜池となりて麦田の傍ら
にあり

溜池に海のなごりの渚あり浜大根のむらさき
に咲く

風つよく吹く干拓地さやぎぬるとき光は穂
麦の畑

干拓にてなりし麦田の茫々と麦うちなびく日
に光りつつ

風ふけば穂麦田ひろく波うちて濃淡をもつ影
あをく顕つ

有明の河口へだてて砕石をうづたかく積む対
岸がみゆ

干拓の土地のはたては遠々にさびし晩春の山
脈の青

ただに広きのに寂しも干拓の麦田は風に遊
ばれながら

干拓地の堤をうがつ満潮をみてより離る麦畑
の道

茫々と麦の穂なびき干拓の田に晩春の風さむ
く吹く

青き闇

夜更けて覚むれば風の音きこえ闇に晴れゆく
空思ひをり

庭なかに咲けるかぼすが曇天のおもき空気に
をりをり匂ふ

水張田につづく小さき町工場廃材を燃す煙く
るく立つ

窓外の闇青々と迫りゐることくに思ふ午前三
時過ぎ

手術日の決りし叔父が些細なる物音にさへ目
覚むるといふ

朝明けてゆく静けさに港より汽船の起動せし
音きこゆ

怖れつつ家に居たればわが叔父の手術ことな
く終りしと聞く

筑後川

暁に音とよみつつ筑後川の水流れゆくわがま
のあたり

筑後川源流にしてなほ広き川原いづこもしし
うどの咲く

筑紫平野の畝整然とここかしこ培ふキヤベツ
の青みづみづし

月光

変はらんとしてわが内に渦巻けるものを感じ
て二夜を明かしつ

夕づきし水路いづこも代掻の濁をふくむ水ほ
とばしる

中空に満ちたる月のしづかなる光はわれと代
田に及ぶ

まのあたり源氏蛩の明滅す音なく生くる蛩の
あはれ

幾百年経りたる榿か下蔭に時の雫のごとき実
を踏む

富貴寺

四万十

台風に遠くかかはる夏雲が広くおほへる海わ
たりゆく

四万十の支流が沼となるところ睡蓮の花あまた日に照る

穂にいでし糸のころ草に親しみて四万十川のほとりを歩む

蒲の穂のおどろに立てるこの沼もつづく低山も晩夏の光

北海道

わが来たる北のはたての街さびしいたやかへ
でに風響きつつ

焼山に硫気の這ひて昭和新山いまだ形を変へ
つつあらん

虎杖の林のうへに庄しることく有珠山の頂
がみゆ

晩夏の風ひやかに洞爺湖のなぎさに実る浜
梨に吹く

林檎畑のなだり広々とつぶらなる実の懐しく
見つつわが行く

北の地のゆる単簡の淘汰あり熊笹の群落路の
群落

待宵の花群れて咲く黄のみえて美笛峠は霧さ
むざむし

向山の霧は晴れつつ待宵の花より低くみづう
み光る

然別湖にて

樹林より蒼あざやかに光顕つ湖のなぎさにわ
が歩み寄る

オンネットー

にはたづみに似る二つ湖相隣りゆふぐれてゆ
く樹海に光る

パンケトー及びペンケトー

晩夏にしてわが来たる弟子屈の丘なだらかに
乳牛いこふ

草がくりゆく川水に光あり釧路湿原広きゆふ
ぐれ

おもひ草

翳雲すがすがと見え晴れわたる丘のいづこも
曼珠沙華さく

茅の根に咲くおもひ草おのづから地に根づか
ぬ花弱々し

庄内町茅場にてナンバンギセルに逢ふ

なだらかにして秋日さす草丘のゆゑなく親し
妻子と歩む

茶の花

わが胸の抉らるること昼日中より父母の諍ふ
こゑす

今年また冬の来向かふ畑のべに茶の花咲けり
白つつましく

弾けつつ青木の青葉燻りて焚火を囲むわれら
暮れゆく

電灯の黄ばむひかりに輪をつくり精霊祭の村
ん衆踊る

自らの疎み来りし傲慢にいつしか染みて勤む
るわれは

明けてゆく十月の空ひえびえと凝る鱗雲の全
体うごく

冬枯道

棕櫚の樹にこもりて騒ぐ雀らのこゑ夕闇にし
ばらく聞こゆ

藁塚のならぶ刈田は寂しけれ安心院盆地に時
雨降りつつ

身の内に愁ひつものりて徐にことしの秋もたけ
ゆくならん

夢に見し有間皇子の墓といふ石の形をさめて
かしこむ

わが生れし家の裏手に冬枯るる道あり行かず
三十年か

遠どほに波の逆巻くごとくにて風の音臥床に
きこゆ

日のあたる刈田を歩む雪解の水に浸りし株踏
みながら

前津江村明石曾家

平成六年

闇 光

さまざまに人に関はる物の香が寒く身にしむ
街上来つ

ビルディングの上に明るむ夕空に心やすらふ
寒明のころ

寒空に光いくばくか増すところとなりつつ棕櫚
の梢明るし

かたはらに春菊のさく道かへる日の延びたれ
ど暮方さむく

春さむき日のゆふべにて月光に貨車のタンク
が鈍く照りをり

飛行機の中のしづけさみづからも浮べる塵も
音速に飛ぶ

一万米の上空にして雲海はありのままなる白
きしづまり

わが見まく欲りし豆柿改修に伐られしといふ
蛇崩あゆむ

つつましく春を迎へん些事ひとつ購ひ来たる
桜餅食ふ

夜更けて時消しゐるに眼にみえぬ光地球に注
ぎてをらん

桜花

わが町の桜やうやく咲くころとなりて明るし
街路も山も

この道の桜にわれもしたしみて幾年経けん妻
生れし町

枝々に花の光をささへたる桜並木が幹くろく
立つ

花冷といふ頃はやも過ぎしかど寒き雨降る心
に沁みて

宇ノ気

沖つかた陽の沈みつつあるときはその全きに
雲の影入る

落日拝にて

日の入りしばかりの水平線のうへ雲茜して
蔽かにあり

水平線のうへの夕空暗けれど雷光るとき雲の
内部みゆ

夥しき寸心蔵書とりわきて左千夫歌集にした
しみの湧く

西田博士の居士号は寸心

稲みのる田なかの道を寸心の墓へとあゆむ夕
べ涼しく

寸心の墓処に秋の日は暮れて灯を点したる電
車過ぎゆく

冬の日は海よりの風つよからんいづこの畑も
砂の積もれる

遠く来し宇ノ気の町の砂丘に昇る朝日を見つ
つすがしむ

持石・聖湖ほか

人麻呂のこと思はれて持石のなぎさの砂をけ
ふわれは踏む 浅井主宰の「緑野」五十周年記念歌会にて

石原のなか流れゆく溪水はたぎちにつづく淀
みの蒼し

やうやくに若葉のたくる頃にして緑くろずむ
山峡を来つ

木々ふかき山道を来て灰白のダムの湛ふる水
のしづけさ

聖湖に來れば昼の寂しさやなぎさに寄する波
に音なく

緑なす山のなだりは聖湖のなぎさとぞなる砂
しろじろと

梅雨ぐもる呼子の町は家々に魚干しおよび干
魚を売る

梅雨雲のくらくおほへる渚村干したる烏賊の
まだ生々し

那智の滝

旅遠く来りしかなや松阪の駅に暮れゆく秋空
あふぐ

競りを待つあまたの鮪一様に切り開かれし尾
の身の赤し

暖竹の生ふるこの川那智の滝を源とせる水澄
みとほる

とどろける水の連続まなさきに那智大滝のお
ごそこかの白

先生の心に触るるおもひにて那智の飛沫のふ
る庭に立つ

先生の碑を見しやすけさに遠くのぞめば音の
なき滝

由布山麓

穂薄にまじる泡立草の花さびし由布山麓に風
起こりつつ

晩秋の由布の高原晴れわたりわがまのあたり
雲の湧きたつ

未枯れたる萩いちめに藪をなす由布山麓に
妻とわが立つ

由布岳のすそ野に立てば風起こりすすきの穂
群蕭々と鳴る

目黒辺り

街人のよりどのごときこの森にからたちばな
の朱実輝く

自然教育園

タールのごと澱む街川ビルディングの間にみ
えて鴨らの泳ぐ

わがあふぐ椅の幹遅しくたかきこず糸に冬空
あをし

じやくづれの道を来れば小春の日に山吹の藪
あをく照る

蛇崩遊歩道

夢 中

心ゆくまま枯原に寝てゐたり風の微かなる音
きこえつつ

歩みゆく鉄道敷に丈ひくき浜木綿の花しろじ
ろと咲く

夏から秋

天井にしきりに響くさみだれをききつつ寂し
夜更けてゆく

窓外に迫りてみゆる屋根瓦つよき五月の日差
に光る

夜更けてしばらく続く地震のありかすけく窓
の鳴る音のする

いつしかに梅雨ふけにつつ心だにおもく濡れ
たる感じしてをり

人口の機能あらはなる地下のみえ都市公園は
竣る日の近し

石仏に依るなりはひの一つにて山なかの家土
産物売る

幼子の手をひきて行く畦道に蛩袋の花をすが
しむ

宇宙にて起こりし星の衝突を居間にて見をり
不思議ともなく

熊本の鎮台を守りをりしとき先祖善三郎の討
たれしといふ
墓にかく刻める

七歳のわれをともなひ山越の旅をせし祖母九
十となる

秋たくる頃としなれば幼き日土間に鳴きをり
し轡虫おもふ

朝雲の輝く朱がやうやくに淡くなりつつ海へ
出でゆく

幼少のわれに頼もしかりしもの四大工業地帯
の円グラフ

悩みたる仕事の一つ辛うじて終り放心状態に
をり

冬の日々

膝に乗ることなくなりしわが娘八歳にして新
聞を読む

静まれる夜の更にして隣家の嬰兒が何か言ふ
声きこゆ

湧きいづる水の囲りに緋鯉らの押し合ひゐた
り冬日受けつつ

寒ざむと暮れつる道に灯のともり服飾店の内
部がみゆる

夜更けてふく風の音蕭々と年のうつろふころ
ぞ寂しき

ふるさとに帰り来りぬまなさきに枯色ふかき
両子山みゆ

枯葦にさむざむと風吹きぬつつおほつこもり
の夕暮さびし

天地の息吹のごとく尊けれおほつこもりの雨
降りしきる

平成七年

新
年

新年のひざし明るく行く道に白みづみづと水
仙の咲く

吹く風に竹群の鳴る音きこえ冬あたたかしふるさとの道

地下水の常湧くならん冬ふかき泉に生ふる水草あをし

遠くにて寺の鐘鳴る音きこえさむき暁の心にぞしむ

阪神大震災

地震にて数千の人逝きし午後音なき樟の樹下を帰る

震災の責任は為政者にありといふ報道パニツ
クの様相をなす

火事跡にはらかなの骨ひろふなど思ひおよば
ぬ映像を見き

石原

ひろびろと河口暮れゆく街川に春まだき日の
残照ゆらく

ゆふぐれの運河を帰る砂利船の残照にひく水
脈ながく見ゆ

幻のごとく暮れゆくビルみえてわが住所なき
街寂しけれ

筑後川源流にして冬の日にしろく乾きし石原
さびし

浅春の海をへだてて何事もなかりしごとく普
賢岳みゆ

長崎の茂木に旧友の関君を訪ねて

大村藩蔵屋敷跡と刻まれし標柱ぬらし春の雨
ふる

散りがたの椿の下に時経りし従二位の尼の石
塔あはれ

大寒の空よりわれにそそぎくる光よ星のむか
しの光

売卜の人ある地下を出でくれば棕櫚の梢にさ
むき夕映

雪ふかき谷地を掘りぬしシヨベル機が人うつづ
くまる形に停る

転
任

父われと隔たり住まん寂しさを幼が妻に言ひ
しとぞ聞く

九年后ふたたび来りしこの街は木々の若葉の
緑目にしむ

横浜市港北区日吉本町に再び来る

われ独りけふより住まんこの街に乾物保存の
容器あがなふ

肥大する東京圏のありありとちはらの丘は削
られてあり

青々と実る枇杷の実なつかしくあふぎみゐた
り蛇崩坂に

麦秋の風

遠く住む九十歳の祖母がこのごろ病むと今夜
わが知る

独り居のわれに飯炊きやらんとぞ祖母が譚言
にいひたりと聞く

えこの花をちこちに散る寧日に愛ふかかりし
祖母の逝く

祖母を葬らんとしてわれの行く道あたたかし
麦秋の風

みづからの命虐げしおほははが夜更に詫びし
こと忘れ得ず

葬りより帰り来りしわが部屋は窓に焼けつく
ごとき夕映

馬小屋のかつて臭ひしこの道をゆけば草生に
蛇莓赤し

祖母の逝きて一月この居間にいまだ杖つく音
するごとし

鳶尾草の咲きにほふこの畑のべにいま祖母の
納骨終へつ

葛飾小遊

日曜の電車にもものうくゐたりしが車掌のふと
きこゑに驚く

懐しき土手を上げば江戸川の川原ひろくみえ
て明るし

さみだれの小降りとなりし昼つかた帝釈天に
友人つどふ

濁りたる水流れゆく江戸川の葦生にひそむよ
しきりが鳴く

九年間過ぎし感じなく再会を喜びわれら江戸
川わたる

矢切の渡舟

土の香のする畑あひの道歩むなつかしき丘近
く見えつつ

九年経て来りし矢切葱などを培ふ畑霧らひて
見ゆる

おどろなる梅の林を出で来しに蓴菜の池梅雨
を湛ふる

さみだれの水輪したしく濁りたる蓴菜池に過
去よみがへる

昼くらきつゆの弘法寺あふぎ見る枝垂桜は葉
々ものものし

わが見しを人にも告げん真間の池永久さなが
らに睡蓮の咲く

万葉集の歌に和す

ふる雨に濁れる小さき池にして手児名といふ
も思ひ及ばず

かつてわが心癒ししこの町かお花茶屋駅に友
と別れつ

ひすがらに友と過ごしてかへりぢの電車に心
やすけくあたり

上海蟹

底ごもる響きのありて大漁の鰯とむらふ言葉
のあはれ

金子みすずの詩

みづからを殺めん友に詫びしとぞ若き信者の
最後を報ず

ひぐらしの声すがすがと鳴くゆふべ中華飯店
の裏道帰る

ふつふつと音せるあはれ命ある上海蟹を湯に
入れんとす

映像につぶさに見ゆる針のなか泳ぐ精子が卵
子に入りつ

さみだれ

奥底にひそむ残虐おほかたはかかる仔細にあ
ること知らず

闘争を生くる過程とみるからに現はなべて致
しかたなし

四十年つちかひ来たるわが心一言にして人は
否めり

独り住むビル四階のアパートの静けさ寂しさ
みだれの音

独り居の寂しさ告げん人のなく暑き夜ぢかに
畳に寝ぬる

再び宇ノ気

赤あかと海に落ちゆく夕つ日に心をさらし佇
みゐたり

遠く来し思ひにひたり道のべにかすけくみの
草を見とむる

萩の花さく道をゆくゆるやかに流るる時を身
に感じつつ

秋雲のひろがるなかに逝く夏のなごりのごと
き積雲がみゆ

炊煙

校庭に高き公孫樹をあふぎつつ心おほどかな
りし日遠し

すぎゆきを今にふくむといふ言葉何かに読み
て諾ひぬたり

ゆるやかに時過ぎぬしかふるさとは空の青さ
に山の緑に

道草をしつつし帰る川原に羊蹄なども摘みて
食ひたり

夕炊ぐ煙が屋根に立ちのぼるわが家見えて頼
もしかりき

冬眠の蛙さがしし日々もありをさなきわれは
野に遊びけり

かたはらに花白じろと萼のさき故里のみち秋
日しづけし

悲しみはかかる時にか湧くならんゆふかたま
けし川の水音

暮れてゆく水を見をればこの川に育まれぬし
頃のありたり

脂の香

日すがらに部屋にこまれる休日の喜びひとつ
新米を炊く

使はざる部屋あるわれの生活を自由といふは
寂しからずや

塵あまた浮ぶがなかをただよへる海月も都市
の関はりのうち

六百年の樹齡とぞいふ松にして日暮の風に脂
の香ぞする

夕づきし林の奥に炭窯のおぼろに見ゆる山を
降りゆく

夢中

氷
解

烏合せる者らに倦めど妥協性なしと言はるる
ことを怖るる

幼子の言葉を待ちてしばらくの沈黙ありぬ夜
の電話に

明日のため早く寝ねんか安らけき今惜しまん
か迷ひてゐたり

謗りゐし者らをすべて認めんとしたれば氷解
けゆくごとし

用のなき電話をしつつやるせなし独り居のわ
れものを言ひたく

山芋の蔓の黄ばみがこのひごろ目につく道を
足重くゆく

朝早く血洗ひつつ独り居になりて暮れつる年
をおもへる

風吹けば坂の公孫樹がいつせいに黄葉を散ら
す嵐のごとく

わがうちに拙く生きん血脈のごときがありて
職に疲るる

出でがたき床を離れて二合ほどの米研ぎをれ
ば朝白みくる

順境を超えんとしたる行動を一年暮れし今に
諾ふ

かかる時寂しといはん暁の光あたらぬ部屋に
めざむる

幼子を鏡のごとく思ふ日のありて電話にとき
にためらふ

香港・マカオ

支那海をゆく船のなかやうやくに余裕のいで
て日本を思ふ

土色ににごる珠江のひた荒れて無尽の浪が薄
日に光る

ふるびたる教会の塀つる草の龍珠紅の花くれ
なみに咲く

懇ろに竹の足場の組まれしはビルの建ちをり
街のをちこち

西江をへだてて中国の街みゆるペンニアの丘
に來りて立てば

ひえびえと風の吹きくるペンニアの丘にし立
てばわが国遠し

おびただしき彩灯のあひ横たはる闇は埠頭の
あたりの潮

瑠頭闇の門前にして乞食は力なく空の缶を差
し出す

密にして汚れしビルの屋上が窓近くみえ物干
されあり

貧民のすむ住居とぞ客観す客観つまりわがこ
とならず

擬宝珠のたくひの広葉椰子の木の類と茂る岬
丘をゆく

土地せまき国にしあれば住居みな空の高みへ
伸びんとしたり

彩光にあふるる街の丘のうへ霧にけぶりて昇
る月みゆ

平成八年

葛飾再遊

生業の苦しきこともけふ一日忘れんとして柴
又に来つ

春たくる帝釈天の仲店はかをりすがしく草餅
を売る

柴又に来るたびに見る竹屋あり昔のさまに心
くつろぐ

飾りなき竿竹あまた立てかけて春昼人の気配
なき店

古びたる木の棧橋にひたひたとまつはる水に
和みてゐたり

矢切なる畑なかの道いましてがた掘られし葱の
からき香のする

紅に咲きさかる梅の一木ありこゑなきものの
賛嘆のとき

世相

報道に見る人々のおほかたは批評しをれどそ
の策いはず

流暢なる言葉が現代を反映す多量伝達のため
のみの言葉

報道の朝な夕なにかまびすし世のみにくさの
ほか扱はず

机にて働く運命もつわれは農の疲弊をいふべ
くもなし

望 郷

消えのこる雪にほとびし道を来て久保殿山は
なだり明るし

幾度となく口上を交はしあふしきたりにして
故里に古る

凝りたるごとく動きのにぶき雲戸の外さむき
夕空に見ゆ

鶏の声にめざめし日々ありき幻のごとくにて
なつかしき過去

ふるさとにいつか帰らん願望のうすれて寒き
部屋にまどろむ

よりどなき心痛めば窓そとに風の起こらん音
さへ待たゆ

寒居

独り居にいつしか慣れて明々と灯りをつけし
部屋にわが寝る

かすかなる音して冬の雨のふる今夜もひとり
食事を終へつ

独り居の手間はぶかんと残菜の練のあめ煮を
そへて飯食ふ

きこゆるは窓のきしめる音のみに独り居の夜
さむく更けゆく

生きゆくも死ぬもひとりと購ひし本に読みし
が夜更は寂し

かたはらに置く物なべて親しけれいつとはなしに集りしもの

さむき夜の寂寞のなか冷蔵庫の憚りのなきその音きこゆ

再来は二万年後といふ星がきぞ赤坂の空を行きしとぞ

帰路

くつろぎて人に逢ひたる日のゆふべ脚軽やかに地下道くだる

身の凍つるほどの寒さのなかを来て満員電車の熱気やすけし

帰路におなじきバスに乗る人を親しくおもふ些事とこそいへ

大雪のなごりが街のをちこちにビル高きゆゑのこる路ゆく

とりわきて喜ぶことにあらねどもことなくゆけり今日の勤も

かへりぢの電車の窓にゆくりなく暮れつる街に昇る月みゆ

東風ふく街

風なきに雪ふりしきる午過の街しづまりて明
治のごとし

わが作る料理に倦みし休日はやるかたのなし
腹空くを待つ

思はざる春の雷にて雨音をかき消すごとく闇
にとどろく

春まだき雨のふる音しづやかに闇の息吹のご
とくに聞こゆ

雪の積む夜のとばりにひびきつつ換気扇鳴る
その音がたく

権力に恭順しつつひるがへり下をあやつるこ
と蔓延す

四十年生きて来りてやうやくに心のかよふ誰
々と知る

山茶花の散る頃となりおのづから暗き根方に
花片の積む

幼子にある決断をせしめたるわれの非力にこ
ころの疼く

かにかくにわが独り居の一年は過ぎゆかんと
す東風ふく街に

重かりし年なりしかど過ぎてゆく一生のうち
の時と惜しまん

雪 霽

先生とわれとの意志のかよふもの葉書一枚守
りて生くる

雪解くる霽しきりにひびきをりかつて先生の
歩まれし庭

わが家

父われの帰りしゆゑか幼子は夜更くるまで側に絵をかく

この町に帰り来りて浅春の風に竹群のさやぐ道ゆく

鶉の雨に鳴く声きこえる床に目覚めつわが家ここは

久々に子を背負ふなど父われの単身赴任の償ひとせん

わが許に来る決断をしたる子が顔のをさなく
隣に眠る

菜花

過ぎてゆく路傍いづこも若きらの行き交ふが
見ゆ焦燥のなく

篠懸の木々みづみづしく若葉して埃にけふる
道に見えをり

おほどかに牛をあつかふ老人が菜の花のさく
傍らを鋤く

憧れて来りしわれか赤壁の地に馴染みたる碑
あふぐ

正宗と誇りて東坡餅を売る店とぞいふにいた
く小さし

公園の一角紐に囲へるは地に並べて駄菓子な
ど売る

ゆきずりに遇ふ人らみなつつましくみえて生
活のために商ふ

煉瓦焼く工場にして煙突も廠舎も赫き煉瓦に
て成る

ひとところ菜の花畑削られて生コンクリート
ブロックを干す

河原に放牧したる水牛が四肢をなげだしま
に憩へる

さむく降る雨に濡れつつ歩みゆく東湖悠久に
湛ふるほとり

鋤き終へし土に坐りて老人のいこふめぐりに
菜の花が咲く

間口せまき店舗の前に店主いで坐るともなく
麺類を食ふ

味うすき草魚を食みて長江のほとりに暮れし
一日をおもふ

この国の言葉したしく行く道のいづこも人の
語らふ声す

彼此なき月

礎のひとつが成りて来し町に彼此なく照らす
月をおもひき

日中友好之舎在黄岡県完成

輪タクを営む中国の青年ら客のなければ屯し
てをり

夢に見し赤壁にいまわれは来つ物売る店も人もしたしく

霧さむき西湖のほとりかすかなる花片もつは桜の類か

地図を売る媪は雨のなかに立ち知る日本語をくりかへし言ふ

釣銭に媪のくれし人民幣いたく汚れしものぞ悲しき

をちこちに咲く諸葛菜いにしへのなごりとどめぬ湖の明るさ

春さむき雨に濡れつつ来し丘に黄鶴楼の威容
をあふぐ

春風のさむき蘇堤を打つ波はいにしへびとの
ため息に似る

流れゆく方いづくとも長江はひろき曇のした
に暮れをり

あとがき

歩道に入会して十二年余、いま私は、初めての歌集を白日に曝さうとしてゐる。出版を決意したのは、これまで二十数年間待望してやまなかつた中国への渡航が昨年叶へられたこと、および今年四十五歳を迎へたのを機に、過去の歩みを一応精算し新たな気持ちで人生に踏み出さうと思つたことによる。これまでも私は、短歌を巧くならうといふよりも、短歌を通じて先師佐藤佐太郎先生の為人および人生觀に感銘し、先生の教へ「写生」を實踐することにより自己の確立を圖らうと励んできた。これからもその姿勢を變へるつもりはないが、五十歳に向かふこれからさらなる覚悟と氣概をもつて、これに精進したいと考へた次第である。

本集の名称は、故里の象徴として私の最も親しんできた菜の花、また昨年先の歌碑のある中国黄州市の赤壁の地に旅をした時にまのあたりにした風景に因んでつけたものであり、日中双方の菜の花咲く風景は、私の心の中で深く交はる原風景であるといふ思ひをつよくしてゐる。

顧みるに、歩道に入会できたことは私にとつて最も幸運なことであつた。先の確立された主客均衡の短歌を追尋しながら、生命の大切さや純粹で公平なものに物觀方を学び得たことは、これからきつと私の人生をより心豊かなものにした。

てくれるに違ひない。まだまだ未熟な私ではあるが、これからさらに学び行ひ、自らの人間的成長をもつて少しでも結社の御恩に報ひたいと思ふ。

最後に、入会から本集の上梓まで懇篤なるご指導ご助言を賜つた現主宰の佐藤志満先生ほか歩道の先達の方々並びに本集の出版をご快諾くださった短歌新聞社の石黒清介社長に対し心から感謝の意を表したい。

平成九年八月

田辺誓司

追記：歌集の改訂について

平成九年に出版した私の第一歌集「菜花爛漫」については、かねがね歌集名も含め満足のいかない点を多々認めてゐた。そこでこのたび、歌集名を「菜花」と改むるとともに、作品も加筆修正し、この改訂版を正式なわが第一歌集とすることとした。

平成十七年七月

田辺誓司識

聴風舎理念

近年、社会が経済至上の傾向を呈して久しく、この間人々は、生産より消費へ、不易より流行への歩を速めてまいりました。そして、時代の流れは、わが国に営々と培われてきた精神文化をも呑み込み、いまや物的価値尺度が社会に遍く浸透しております。

一面、かすかながら新たな兆しもうかがわれます。明らかに不利な立場から正義を貫く法律家や、人道援助に生涯を掛ける活動家、また身体の不利益を反転し周囲に勇気を与える青年や、地域社会への奉仕に地道に取り組む個人の活動、等々であります。

こうしたなか、私たちはここに、ヒューマニズムあふれる社会の構築を理想に聴風舎を興し、地方にあつて文芸、哲学、種々の芸術等に励む人々の活動を、良書の普及や刊行等を通して支援すべく歩み始めました。身近に営まれる文化活動を全国の同胞とともに共済し、新しい文化の形成へつなげようとの熱意からであります。この趣意が理解を得られ、新しい時代の潮流となるよう念願してやみません。

一九九九年十月

舎主

【著者略歴】

田辺誓司（たなべせいじ）

- 1952年 大分県東国東郡西武蔵村大字両子に生まれる。
- 1975年 長崎県立国際経済大学卒業。
- 1985年 歩道に入会する。
- 1991年 両立を目指していた俳句を断念し、「田辺風信子句集 - 草笛」の出版を最後に短歌に専念する。
- 1993年 歩道同人となり現在に至る。

現住所 〒874-0836 東大分県別府市東莊園5 - 2

歌集 菜 花

平成22年10月15日発行

著 者 田辺誓司

発行者 寺家佳美

発行所 聴風舎

〒874 - 0833 別府市鶴見7組3

(TEL 代表0977 - 25 - 4320)

電 磁 聴風舎

製 作 聴風舎

P 1 4 2 9 E (本体 1 4 2 9 円 + 税)